義母

Accident

1　事故

ヘザーは、あの「事故」のことを思い出す度に、微笑まずにはいられない。

十六歳になる義理の息子のジョーを連れて、ショッピングモールで買い物をしていたときのことだ。階段を踏み外して滑ってしまったヘザーは、夢中で片手で手すりにつかまり、片手でジョーにすがりついた。

ジョーが悲鳴をあげてくずおれた。ヘザーは、偶然にも、ジョーの睾丸を強く握りしめ、そのまま倒れてしまったのである！

悶絶して起き上がれないでいる義理の息子の姿に、ヘザーは震え上がった。近くにいた人々が足を止め、彼女の周囲に集まってきた。そのなかに、ジョーと同じくらいの年齢の女の子たちがいた。彼女らの話し声が聞こえてきた。

「どうしたの？」

「見なかったの？　あの女性が滑っちゃって、男の子の金玉をつかんじゃったのよ」

「うそ！」

「すごかったよ。あんまり強く引っ張ったんで、ジーンズがもっこりしちゃってさ、おちんちん

の形までくっきり見えてたんだから……」

ヘザーがジョーの父親と結婚するために大学を中退したのは、十九歳のときだった。すぐに男が出ていくかたちで離婚したため、今でもジョーと同居していた。

彼女は常に男の目をひく女性だった。長く波うつブルネットの髪、１６０センチの身長で体重４９キロ。長くしなやかな脚に、９３センチの巨乳。深い胸の谷間を見せながら歩くのが大好きだった。

だが、義理の息子がいるために、ろくにデートもできないでいる。それだけならまだしも、最近、ジョーがちらちらと自分の胸を見やっているのに気づいた。彼女はそれがとても嫌だった。

ヘザーは、午後に起こった「事故」を思い出しながら、右手をベルトの内側に滑りこませ、ある決心を固めたのだった。

翌朝。朝食のためにダイニングに現れたジョーは、まだ少しだけ腰をかがめて痛そうに歩いていた。

「おはよう。大丈夫？」

ダイニングとキッチンはカウンターで仕切られていた。キッチンにいたヘザーは、おかしそうにしている顔を見られないようにして声をかけた。

「うん、大丈夫だよ。まだちょっと痛いけど、かなりよくなった……」

ジョーは答えた。

「ごめんなさいね、ジョー。あそこで滑ったとき、まさかあなたの小さなタマタマをつかんじゃったとは思わなかったものだから」

彼女は、いままで出会った金玉のなかでも、ジョーのは大きい部類に入ることを知っていたが、あえて「小さなタマ」と言った。

「大丈夫だってば、ママ」

ジョーイは幾分不快そうに言った。

「朝ごはんはなに？」

その質問を待っていたのだ。ヘザーはキッチンから出てきた。彼女は、昨日買ったばかりのグリーンのタオル地のローブを着ていた。裾が短く、美しい脚が丸見えだった。だらしくなく羽織っていたため、すばらしく深い胸の谷間が覗いていた。

彼女は、テーブルに近寄り、前屈みになってジョーの目の前に朝食のトレーを置いた。ジョーの眼が見開かれ、彼女の乳房に釘付けになっていた。

「今日は早起きして御馳走を作ったのよ。昨日のお詫びにね。ベーコンにトースト、フライドポテト、それにスクランブルド・エッグよ」

ジョーは急いで義母の胸から視線を逸らした。ヘザーはローブの胸元をかき寄せ、密かに笑っ

た。ジョーの股間は勃起していた。義理の母親の胸を見ておったてるなんて！

「ご飯を食べてて。私はシャワーを浴びてくるわ。今日は出掛けなきゃならないの。ＰＴＡの積立金のために、クルミ入りのパンを作ってるのね。私の役目はクルミ割りなの。あはは、私、もう二日続けてクルミを割ってるのよね。昨日はあなたのクルミ（nuts）、今日はパンに入れるクルミ！」

彼女は笑ったが、ジョーは居心地悪そうに椅子の上でもぞもぞしていた。

「あ、そう……わかったよ、ママ」

ヘザーがバスルームに消えるまでの間、彼は義母の胸や脚を見ないよう、視線をあちこちに彷徨わせていたのだ。

ヘザーは急いでシャワーを浴びた。あまり長く浴びていると彼女の企みを実行するチャンスを失ってしまう。彼女は豊かな乳房や美しい脚に滴る水滴をタオルで拭うと、ミニスカートをはき、シースルーの白いブラウスを着た。足には３インチのハイヒールを履いた。それが彼女のお尻をいちばんきれいに見せるらしい。

着おわってから、彼女はじっと時計を見つめた。そして、ジョーが学校に出掛ける時間になるのを待ち、バスルームを出てキッチンに向かった。

ジョーは皿を洗おうとしていた。

「私がやるわ。急がないと遅刻するわよ。あ、ちょっと待って、忘れてた！　あなたにあげるものがあるの。ドアのところで待っていて」

ヘザーは、目論見どおり、義理の息子が自分のミニスカート姿に眼を奪われたことに満足した。ジーンズ越しに、彼のペニスが硬くなっているのが見えたのだ。ヘザーは足早に自分の部屋へと急いだ。大きな胸が激しく揺れた。

昨日、ジョーに買ってあげたバックパックを取り上げた。なかには、彼が昨夜持って帰った四冊の本が入っていた。

「１５キロはあるな……」

ヘザーは思った。

「完璧！」

彼女は急いでドアに向かった。ジョーがそこで待っていた。

「ジョー？」

彼女はそう言い、バッグを大きく背後に振った。

「なに、ママ？」

ジョーは振り向いた。

ドカッ！

ヘザーが大きくはずみをつけて振り上げたバッグが、ジョーの睾丸に叩きつけられたのだ。

「ぎゃあああああああ！！」
ジョー絶叫し、両手で股間を押さえて床にくずおれた。
「あ～！　ごめんなさい！　大丈夫？」
ヘザーはジョーに駆け寄り、屈み込んだ。彼女の胸がちょうどジョーの頬のあたりに触れた。
「ちょっと見てみるね」
ヘザーは素早く、股間を押さえるジョーの手を振り払い、ジーンズをずりおろした。
ジョーのペニスは勃起したままだった。さらにヘザーはパンツをおろそうとした。ジョーは抗ったが、激痛のあまり効果的な抵抗は無理だった。彼の下半身は剥き出しにされてしまった。
ヘザーはさらに屈み込み、硬いペニスを手で握りしめ、陰嚢をのぞきこんだりした。彼女が動く度に、乳房の先がジョーの鼻を撫でた。
ジョーはたまらず身じろぎし、頭を浮かせた。結果的に、義母の柔らかな大きな胸を突き上げた。
「あっ！」
ヘザーが叫び、つんのめった。その拍子に、ペニスを握っている右手が強く握りしめられ、爪が食い込んだ。同時に、左手がジョーの陰嚢に撃ち下ろされた。ヘザーの体重が乗った左手の掌と床の間で、一瞬、睾丸がひしゃげた。

ジョーは絶叫し、気絶した。
「あちゃ～、やりすぎたかな……」
ヘザーは狼狽した。潰してしまっていたら、どうしよう？
急いで部屋に戻り、救命箱から取り合えず外傷薬や消毒液を取り出し、息を切らせて玄関に戻った。
見ると、ジョーのペニスはまだ勃起しているではないか。
安堵と同時に、ヘザーはなぜか腹が立ってきた。彼女は、きれいな脚を後ろに思い切り引き、全身の力をこめてペニスを蹴った。
ハイヒールの爪先が、陰茎をへし折らんばかりに硬いペニスに食い込んだ。ペニスは、穴の開いた風船のように萎みはじめた。
ヘザーはやっと満足し、「治療」にとりかかった。
まず、ジョーのパンツをすべて脱がせ、股間を大きく広げ、しぼんだペニスを手にとった。薄い皮膚に、爪の食い込んだ痕や、爪先で蹴った傷が痛々しくついていた。
「う～ん、目を覚ましたらなんて説明すればいいのかなあ……」
爪の痕は「事故」で済むが、蹴ったのは明らかに「故意」なのだ。
亀頭を指でつまんで引っ張ったり、縮めたりしてみた。それを繰り返しているうちに、ジョー

の全身が痙攣をはじめた。失神したままだったが、快感を味わっているらしい。
ヘザーはくすくす笑い、しばらくそうやって遊んでいた。いつの間にか、彼女の乳首が硬くなっていた。
「おっと」
こんなことをやって遊んでいる場合じゃない。
ヘザーは亀頭から指を離し、陰嚢に掌ですくい上げ、転がしてみた。睾丸はさほど大きくはなかったが、彼女がこれまで見てきた数多の睾丸のなかでは、平均以上と言えた。
右の睾丸を軽く指で弾いてみた。ジョーが激しく痙攣した。さっきが快感故の痙攣だとしたら、今度は明らかに苦痛に苛まれている。
今度は左の睾丸を指で弾いた。またジョーが痙攣した。ヘザーは面白がって、左右を交互に、鼻唄をうたいながら指で弾いた。
「うう……」
ジョーが大きく呻き、眼を覚ました。
「あ、気づいた……ね、大丈夫」
「うう……わからない……タマが……いたい……」
ヘザーは顔を背け、笑いをかみ殺した。
ジョーは、なんとか起き上がろうともがいたが、ヘザーは両手を彼の脚に置いて言った。

「まだ動いてはだめよ。ママがなんとかしてあげるから」
「……い、いたいよう……」
「ごめんね、ジョー。でもね、あなたがママのおっぱいを触ったりするからよ。びっくりしちゃって、それでつんのめったんだから。まだ子どものくせに……この変態！」
「ち、ちがうよ……」
「ママに口答えは許しません！」
ヘザーは言い、いきなり睾丸を左手でぴしゃりと叩いた。
「ぎゃあああああ！！！」
ジョーは絶叫した。
「あ、ごめ～ん！」
ヘザーは今度は優しく陰嚢を掌で包み込み、軽くゆすった。
「痛かった？　私には分からないから……」
「……う、うん……」
「こうすれば、少しは痛みが収まる？」
もっと痛いんだけど、と言おうとしたが、ヘザーは急に真顔になった。
「でもね、あなたのやったのは悪いことなのよ」
ヘザーはジョーのほっぺたをきゅっとつねった。それから優しい微笑みを浮かべた。

「まず、ママに謝りなさい」
理不尽な気がしたが、とにかくジョーは窮地を脱したい一心で言った。
「ご、ごめんなさい……」
「よろしい」
「だ、だから……」
「なに？」
「タマから……手をはなして……」
「あ、そうね！　とにかく傷を洗浄しないとね」
ヘザーはそう言い、脱脂綿をアルコールに浸した。
「ちょっと痛いかもしれないけど、我慢してね」
そう言いながら、ヘザーはジョーのみぞおちを左手で押さえ、ペニスの傷口に脱脂綿を近づけた。
「ママ、待って！」
ジョーは叫んだ。だが遅かった。アルコールが、ジョーのもっとも敏感な局部の皮膚の傷口から侵入し、痛覚をひどく刺激した。
ジョーは悲鳴をあげて尻を後ろに引こうとした。だが、ヘザーはしっかりとペニスをつかんでいた。結果的に、ジョーの行為は、ペニスの傷口を広げるだけだった。

「じっとしてて！」
ヘザーは義理の息子を叱り飛ばし、今度は乾いたガーゼで、ペニスを拭きはじめた。ガーゼがペニスの表面をこすっていく度に、焼けつくような痛みが走ったが、ジョーは歯を食いしばって耐えた。
「これでよし、と！」
ヘザーはそう言い、ペニスを離した。
ジョーは安堵すると同時に全身の力が抜け、へなへなと頭を床に落とした。
「学校に電話しとくわね。今日はお休みにするって」
ヘザーは、ジョーの陰嚢の周囲に、注意深くバンダナを巻き付けながら言った。
「この袋を固定しとくね。歩くとき、太股に触れたりすると痛いだろうから……今日は一日じゅう、外気にさらしておいたほうがよくなると思うわよ」
彼女の脳裏には、すでに別の「企み」が浮かんでいたのだ。
「はい、終わりっと。テレビでも見てる？　私はほかの用件を片づけるから」
ヘザーは立ち上がり、ジョーのズボンを拾い上げてバスルームのそばの洗濯機に放り込んでから、自分の部屋へと向かった。ジョーは、テレビのリモコンを手にカウチに寝そべった。
ヘザーは自室に入ると、ドアを閉め、服を着替えはじめた。実際には彼女はＰＴＡの集会には

一度も出たことはなかったが、一時間以内にバイクの教習所へ行かねばならなかった。
彼女は服を脱ぐと、鏡にうつる自分の体を見つめた。さきほど義理の息子のペニスを蹴りつけた脚。義理の息子の睾丸を蹴りあげた膝。義理の息子の睾丸を握り潰した手。
乳首は固く尖り、股間は濡れていた。このまま自慰に耽りたかったが、時間がなかった。ヘザーは急いで身繕いをした。白いぴっちりしたパンツに、膝までのブーツ、白のボタンダウンのシャツ。
着替えを終え、テーブルに置いてあった革繋ぎのバイクスーツを取り上げ、それからキッチンに行ってロープを取り出した。リビングに行くと、ジョーはカウチで眠りこけていた。
ヘザーは彼を仰向けにし、両手を頭より上に上げさせ、脚を大きく開き、ロープで縛ってジョーが動けないよう固定した。
ジョーが目を覚ました。
「いいのよ、寝てなさい」
ヘザーは優しく言った。
「寝返りなんかうったとき、あなたのタマタマがぶつかったりしたら大変でしょう。だから動かないようにしただけよ」
ジョーはやや困惑気味だったが、ヘザーは手にしたブランケットを示して言った。
「風邪を引かないように、これをかけておいてあげる」

ジョーは再び眠りに落ちた。ヘザーは、ちょっと考えてから、ブランケットを息子にかけてやるかわりに、ジョーから離れた床の上に放り出した。
「おやすみ」
そう声をかけて、ドアを閉めた。ジョーは、下半身をさらけ出し、大きく脚を開いていた。下半身は裸で、巻き付けられたバンダナが，ペニスの傷と陰嚢の腫れが痛々しくヘザーの荒技の痕跡を隠していた。

2　覗き

教習所のレッスンが終わったあと、ヘザーは彼女の教官であるスーザンに、朝食を食べ損ねちゃったからお腹ぺこぺこ、と言った。
スーザンは二十一歳。身長１６０センチと小柄でほっそりしていたが、かたちのよい胸だけが目立って大きかった。革繋ぎのバイクスーツを脱ぐと、褐色のレザーのパンツに白いブラウスがよく似合っていた。
スーザンは、
「じゃ早めにお昼にしようか」
と誘った。ヘザーは、

「じゃあ、うちに来る？」
と提案した。もちろん、彼女は腹に一物持っていた。スーザンは、ヘザーの料理の腕前の評判を聞いていたので即座に同意した。
スーザンの運転で家に戻る途中、ヘザーは、
「お店に寄りたいんだけど、ジョーが学校から帰ってくる時間なの。締め出してしまうとまずいから、買い物をすませるまで、家にいてくれないかしら」
と言った。
「いいわよ」
スーザンは答えた。ヘザーには可愛らしい義理の息子がいることを知っていたので、内心、いたずら心が働いていた。
ヘザーは内心でほくそ笑んだ。ジョーを見つけたら、彼女、どんな反応をするかしら……。
家に着くと、ヘザーはスーザンに「これ持っててくれる？」とバイクスーツを手渡し、食品店へと去った。

スーザンは家に入ると、汗を流そうと思った。バスルームに行き、シャツとブラを脱ぎ捨て、まず顔を洗い、それから胸のあたりの汗をタオルで拭った。
水の栓を閉めたとき、リビングルームからうめき声が聞こえてきた。

スーザンは凍りついた。バスルームのドアは開けっぱなしで、リビングルームからは丸見えなのだ。
彼女はバイクスーツを拾い上げ、リビングを覗いた。
ジョーがカウチに寝そべっていた。彼のペニスは雄々しくそびえ立ち、根元をきつくバンダナで締めつけられているため、血が睾丸に向かって垂れていた。

「この痴漢野郎！」
スーザンは絶叫した。
「なにおったててんの！　私を覗き見しながら、オナニーしてたってわけ？　なに、じろじろ胸ばっか見てるのよ、この変態のマセガキ！」
ジョーが弱々しくなにか呻いたが、スーザンには聞き取れなかった。
「うるさい！　聞く耳もたない！」
スーザンはジョーのシャツをまくりあげて、彼の口に突っ込んで塞いだ。
「痴漢がどんな目にあうか、教えてあげるわ！」
言うなり、スーザンは革つなぎのバイクスーツで、ジョーのペニスをはたいた。ジョーは泣き叫んだが、スーザンは容赦なく重いバイクスーツをペニスに叩きつけた。やがてペニスはしょんぼりと萎えてしまった。

「痛い？」
スーザンは、ジョーの口からシャツの裾を引っ張り出した。
「い……いたい……です……」
ジョーは声を絞り出した。
「あ、そう。じゃ、今度は気持ちよくしてあげる」
スーザンはカウチに這いあがり、ジョーの胸に跨がり、完璧な乳房を彼の顔に押しつけた。
「どう？」
そう訊ねながら、スーザンは両手をジョーの腹部に這わせ、二つの睾丸を指でつまんだ。
「う、う……」
ジョーの返事は、スーザンの重い乳房に塞がれた。
「聞こえないぞ」
スーザンは睾丸を強く弾いた。そして態勢を変えて、今度はジョーの顔に跨がり、睾丸を弾いたり、ひねりあげたりした。ジョーの全身がわななき、悲鳴や絶叫や哀願が心地いいバイブレーションとなって、スーザンの陰部を刺激した。
やがて、あまりの苦痛にジョーは悲鳴をあげる気力まで失った。
スーザンは立ち上がった。彼女の乳首は固く尖り、股間は濡れていた。
「ママがこれを見たら、どう思うかしらね、変態くん」

ジョーはスーザンを見上げ、呻いた。
「でも……ママは……」
言いおわらぬうちに、スーザンはバイクスーツを、激しく痛む睾丸に叩きつけた。ジョーは再び失神した。
スーザンは素早く衣服を着け、リビングルームを出て、ドアのところでヘザーを待った。

ヘザーが帰ってくるなり、スーザンは言った。
「ジョーはまだ帰ってこないわ」
きょとんとした顔のヘザーに、スーザンはおいかぶせるように付け加えた。
「２０分後に別のレッスンがあるのを思い出したの。もういかなきゃ」
スーザンは風のように消えた。
ヘザーは首を傾げながらリビングルームに入った。
カウチのそばにバイクスーツが置いてあった。ジョーはだらりと寝そべっていた。
寝ているわけじゃない。失神したんだ。ヘザーは確信した。
ヘザーはジョーのロープを解き、バイクスーツを拾い上げ、リビングを出た。バイクスーツが、義理の息子の睾丸にどんな音を立てたのだろう、と想像しながら。

その日の夕方。
「あら、いまちょうど起こそうと思っていたところよ。よく寝られた？」
ジョーがキッチンに足を引きずりながらよろよろ入ってきたのを見て、ヘザーは言った。
「悪いんだけど、ブーツを脱ぐのを手伝ってくれない？」
ヘザーはそう言い、椅子に腰をかけた。ジョーは、痛そうに歩いて彼女の前に立ち、彼女にお尻を向けた。ヘザーは右足を差し出してジョーの両脚に挟ませ、左足を彼の尻に押し当てた。
「三つ、数えるわね。いい？　1、2……」
2まで数えたとき、彼女は右足を思い切り引き、同時にジョーの尻に当てた左足を踏ん張った。右足の甲がジョーの睾丸に当たって止まり、ブーツが脱げた。
「ありがと、ジョー」
ジョーは激痛に顔を歪め、体を折り曲げて苦しんでいたが、ヘザーはそれに気づかぬふりをして言った。
「じゃあ、もう片方もお願いね」
ジョーが床に膝をついた。ブーツはまだ、彼の股間にしっかりと挟まれていた。
「あら！　また、玉に当たっちゃったの？」
ヘザーはわざとらしく叫んだ。
「ここに座って」

ジョーは、涙をこぼしながら、ヘザーの前に尻をついて座った。
「タマタマを見せて」
ヘザーはジョーの両脚を開かせ、両足を椅子の両脇に乗せ、ロープで縛って固定し、陰嚢を覆ったバンダナをほどいた。
「あちゃあ！　前よりひどく腫れ上がってるじゃない！」
ヘザーは立ち上がり、ストーブに向かって歩いた。
「そういえば、ホットチョコレートを作っていたの。飲むでしょ？」
彼女はそう言いながら、湯気のたったカップを持って戻ってきた。
「さあ、どうぞ」
と差し出したカップをヘザーは取り落とした。
「あ、いけない！　すぐに拭くから」
同時にジョーは絶叫した。熱いココアが、彼のペニスと睾丸に浴びせられたのだ。
ヘザーはすぐに布巾を取り出し、ジョーの股間を拭おうと屈み込もうとして、床にこぼれたココアに足を滑らせた。
ヘザーはジョーの上にどさりと倒れた。同時に、彼女の膝がジョーの睾丸を直撃した。ジョーが絶叫した。ヘザーは慌てて立ち上がろうとして、また滑った。再び、彼女の膝がジョーの股間に叩きつけられた。

ジョーは今度は叫ばなかった。失神してしまったのだ。
ヘザーは大きく肩で息をしながら、しばらくじっと動かずにオルガズムを味わっていた。
ジョーの右の睾丸はヘザーの膝小僧に押しつぶされ、ぺちゃんこになっていたのだ……。

3　治療

数週間後。
ヘザーはキッチンでジョーの帰宅を迎える準備をしていた。
その前日、ヘザーは病院にジョーを見舞い、彼があの日の「治療」によって半ば癒されていると確信した。
だが、「治療」したのは、ひとつだけだ。残るひとつにも「治療」を施し、完全に彼を「癒」さなければならない。ヘザーはそう決心していた。
彼女が直接手を下す必要はない。哀れなジョーの悲劇への別のシナリオが、すでに彼女の脳裏には描かれていたのだ。

ヘザーは病院で、看護婦がジョーの焼けただれたペニスや陰嚢をきつくガーゼで締めつけるのを目撃し、ひとつのアイデアを思いついていた。

ジョーが病院から帰宅するやいなや、彼女はジョーをベッドに寝かせ、それからタオル地のローブに着替えた。そして、ジョーの寝室にソーダとチップスを運び、しばらく寝室のなかをうろつき、まだ体をうまく動かすことができないジョーイのために、彼が脱ぎ捨てた下着を拾って洗濯籠に放り込みながら、苦しげに顔を歪める義理の息子の表情を楽しんだ。
ヘザーが屈み込む度に、彼女の胸の谷間や、バスローブの裾から延びるきれいな脚が、ジョーの視界に飛び込んでくる。勃起するペニスはきつく巻かれたガーゼに圧迫され、傷口を刺激するのだ。
「ジョーイ。気分はどう？　まだ痛むみたいね。ちょっと見てみようか」
ヘザーはからかうように言った。
「え？　いや、ママ、だいじょうぶだよ。平気だよ……だから……いいってば……」
「そう？　ならいいけど。今度の一件は気の毒だったわね。次からは気をつけるのよ。女の子に熱い飲み物を持ってきてもらうときは、注意して行動しないと」
ヘザーは、まったく自責の念を感じていないようだった。なんで自分のせいにされるんだろう、とジョーは訝しがった。
「でも、ママ……」
抗弁しようとしてジョーは呻いた。ヘザーがどさりとベッドに腰を掛け、ひどく揺れて痛む睾丸をまたも刺激したのだ。

「ほんとに気をつけないとね。もうタマタマは一個しか残っていないんだから」
ジョーは信じられなかった。ヘザーはけらけら笑いながら、息子の睾丸を潰したことを悔いてもいないようなのだ！
「楽にしなさい。後でまたガーゼを取り替えに来るわ。看護婦さんからちゃんと教わったから大丈夫よ。おやすみ、片金くん」
ヘザーはまたもわざとらしくベッドを揺さぶって立ち上がり、寝室を出た。彼女の背後で、ジョーがまたも呻くのを耳にし、ほくそ笑みながら。

それから二週間、ジョーは学校を休み、ヘザーは何度もガーゼを取り替えた。
「なんで、こうすぐに緩くなっちゃうのかしら？」
ヘザーは、傷ついたペニスのガーゼを取り替えながら、彼をからかった。
彼女はずっとタオル地のローブで過ごした。それ以外は、下着のまま歩き回っていたのである。
「あなたが学校にいっている間は、いつもこんな恰好なのよ。あなたが休んでいるからといって、いつもの習慣を変える必要はないでしょ」
彼女は、彼女にはやや小さすぎるくらいのレースのブラのまま歩き回りながら、ジョーにそう言った。もちろん、これは彼女の企みのためにも意味のある行動だった。
ヘザーは、一日に三度、いやときにはそれ以上、ジョーのガーゼを取り替えた。その度にジョーをからかった。睾丸をひとつ潰れれてしまったというジョーにとっては生涯の重大事も、ヘザーにとってはからかいの種でしかないようだった。

とうとうその日が来た。
ヘザーは、計画を実行に移す準備を万全に整えたのだ。
彼女はジョーを家に置いて、毎週火曜日のバイクのレッスンにでかけた。スーザンに会うのは、ジョーが入院してからは久しぶりのことだった。
レッスンの途中、ヘザーはスーザンに、あの日なにがあったのか訊ねた。
スーザンは、ヘザーの家にいったときジョーがどんな状態にあり、ジョーの覗き見行為に如何に憤ったか、そして、どのようにあの「事故」が起こったかを説明した。ヘザーは、ふむふむとうなずき、自分も同じような目に何度もあい、いかにムカついていたかをコメントした。
「あの子は、私の胸を覗きながらマスかいてたのよ！　だから頭にきて、バイクスーツをキンタマに叩きつけてやったの！」
スーザンは言った。
「一回だけ？」
「そうよ」
「私だったら、一回じゃすまないわ。一度、カンカンになって何度もあの役立たずのタマを失神

するまで叩いてやって、それからあのチンポコを蹴ってやったの」
ヘザーは言った。
「あの日の朝もそうだった。彼の股間にバッグをぶつけちゃったとき、彼のタマタマが大丈夫かどうか調べたの。彼は勃起させてただけじゃなくて、私の胸を触ったのよ！」
ヘザーが言いおわると、スーザンは同意して憤った。
「それ、完璧な変態じゃない！　そんな子と一緒に暮らさなきゃならないなんて、同情するしかないわ……」
スーザンの返事を聞いて、ヘザーは、時来たれり、と確信した。
「心配でたまらないのよ。義理の子とはいえ、自分の息子が変態の痴漢野郎になってしまわないかって……。タマはまだ一個残ってるわけだし」
ヘザーは口を尖らせて、何度ガーゼを替えても、ジョーのペニスが勃起するためにすぐに緩んでしまうのだ、と言った。
「ほんとのところ」
ヘザーは誘うように言った。
「ガーゼが動かないようにする方法は……」
彼女はスーザンを一瞥した。
「あるのかな？」

「あるよ！　二人でやれば」
スーザンは、ヘザーの計画を知って興奮したようだった。
「ジョーは家にいるわ……さっそく取りかかりましょう」
「了解」
「私のバイクスーツは、あなたに預けるわ」
二人は笑った。

4　去勢

女たちは家に着くと、静かに後ろのドアから忍び込み、ジョーがカウチで居眠りしているのを確認した。
それから、他の部屋に移動して、黒いレザーのソングに着替え、3・5インチの黒いハイヒールに履き替えた。
リビングに戻ると、ヘザーは注意深くジョーのスウェットショーツを脱がせ、両手を後ろに回して縛った。
「あなたが起こしてくれる？」
ヘザーはスーザンに囁き、意味ありげにスーザンが手にしたバイクスーツに目をやり、それか

らジョーの一個だけ残った睾丸を見た。
「言われるまでもなく！」
スーザンは囁き返し、ジョーに近づいた。そして、手にしたバイクスーツを、優しくジョーの睾丸に振り下ろした。
スーザンは何度も何度も、しだいに力をこめて睾丸にバイクスーツを叩きつけた。ジョーは無意識に体をひねってバイクスーツをよけようとした。
「起きなさい、ジョー！」
ジョーは、あまりの股間の激痛に目を覚ました。ヘザーはくすくす笑い、ジョーに歩み寄った。
「ママはぜんぶ知ってるのよ。この二週間、あなたは私の胸や体を見ては興奮してたってことを。スーザンからも聞いたわ。あの日、あなたは自分で自分の体を縛り、彼女を覗いて気持ちいいことをしてたんでしょ。もう二度と、そんな悪さをしないよう、あなたの残ったタマを潰してやることにしたのよ」
ヘザーはそう言いながら、義理の息子に猿ぐつわをして口を塞いだ。ジョーの眼には恐怖の色が浮かんだ。彼はもはや残ったひとつの睾丸を砕かれる運命から逃れられないことを悟ったのだ。
ヘザーはぞくぞくした。
「私のおっぱい、好きなんでしょ？」
ヘザーはそう言いながら、彼の胸や顔に乳房を押しつけた。

「やわらかいでしょ？　お肌も滑らかでしょ？　でも型崩れしないのよね」
ジョーのペニスが勃起しはじめた。
「見てよ！　あんたのちっちゃなペニスが、ママのおっぱいで固くなってる！」
ヘザーは言いながら、ペニスに手を伸ばし、それを思い切りつかんで上に引っ張った。ジョーは激しく痙攣した。ヘザーは容赦なく、ジョーを強引に立たせた。
「ね、スーザン。こんなに固くなってるのよ！」
ヘザーはクスクス笑い、ジョーをスーザンのほうに突き飛ばした。ジョーはよろめきながら、スーザンに抱き抱えられ、とたんに硬直した。スーザンは、彼の股間を膝で蹴り上げたのだ。
「あら、ごめんね！　膝小僧がタマタマに当たっちゃったみたい。おっと、タマタマってのは変ね。一個しかないんだもの……。それも、もうじき、なくなるんだよね！」
スーザンは、いまにも倒れそうなジョーを支えながら哄笑した。
「あんたの言うとおりよ、ヘザー」
スーザンは、ジョーのペニスを手で握りしめて言った。
「まるで岩みたい！」
そう言いながら、ジョーをヘザーのほうに突き飛ばした。
「ママのところにおいで、ジョー」
ヘザーは、よろめくジョーに向かってそう言い、今度は美しい右脚を思い切りはね上げた。ハ

イヒールの爪先が、完璧にジョーのたった一個残った睾丸に打ち込まれた。
ジョーはへなへなと紙屑のように床に倒れた。ヘザーはしゃがみこんで、ジョーの陰嚢を調べ、まだ潰れていないことを確認してほっと安堵のため息をついた。これまで練りに練ってきた方法を試さないうちに潰してしまっては困るのだ。
「ああ、よかった。蹴ったときにタマがへこんだような感触があったの。でもまだ大丈夫ね」
ジョーは何も言わず、ただただ涙を滝のように流しながら床に横たわっている。
「あんたのママってすごいよね」
スーザンはジョーをからかいながら、彼の股間を覆った両手を払いのけた。
「こんなちっちゃなターゲットを、誤たずにねらい打ちしたんだから」
「や、やめて……」
ジョーは嗚咽した。だが、スーザンは容赦なくジョーのペニスをつかみ、乱暴に引っ張って、膝をついて立たせた。
「ジョーを、あそこに跪かせて」
ヘザーは、部屋の隅に置いてあるアームチェアを指さした。スーザンはジョーのペニスをつかんで引っ張り、そこまで歩かせた。ヘザーは、ジョーが立った姿勢のまま、彼の脚や腕、胴をアームチェアに縛りつけた。
「あんた、これ好きでしょ？」

ヘザーは笑いながら、かがみこんで乳房をジョーの鼻先にぶらさげた。
「最近、このおっぱいばかり見てたでしょ？　ほら、触らせてあげる」
そう言いながら体を揺すり、みごとに実った乳房でぺたぺたとジョーの顔を叩いた。
「じゃあ、私はお尻を見せてあげる！」
スーザンはそう言いながら、ジョーの顔をアームチェアの背に押しつけ、その上に跨がった。
「見て！　お尻も大好きみたい！」
スーザンは笑って、ますます固く勃起するジョーのペニスを指さした。そして、ロープをきつくペニスに巻き付け縛った。
二人は、カウチからバイクスーツを拾い上げた。ヘザーが言った。
「いつまで勃起してんのよ！」
いきなり、ジョーのペニスにバイクスーツを叩きつけた。つづいて、スーザンが亀頭にバイクスーツを打ちつける。つづいてヘザー。ジョーのペニスは間断ない女性たちのバイクスーツ攻撃にさらされ、真っ赤に腫れ上がった。
「信じられない！」
スーザンが叫んだ。
「まだ、おったってるじゃない！　別のやり方を試してみるわ」
言うなり彼女は、ジョーの傷ついた亀頭を爪先で蹴りつけた。ペニスが半ばで折れ曲がり、腰

骨に食い込んだような形になった。
「ペニスを蹴るのも面白いでしょ」
ヘザーが言った。
「ジョーには内緒だったけど、彼が失神している間に、蹴ってやったのよね」
言いながら、ヘザーはハイヒールの踵を、ペニスのつけ根に何度も叩きつけた。
ジョーは悶絶しながら、信じられない思いでいた。彼の義母は、ただ楽しみのために、彼のペニスを蹴ったことがあるというのだ。なぜ、あんなにペニスが傷ついていたか、やっと理解できた。
「これもだめじゃない！」
スーザンは、まだ勃起しているジョーのペニスを指さして言った。
二人は、ジョーのいましめを解き、床に座らせ、脚を大きく広げさせた。
「閉じちゃだめよ」
ヘザーが命令し、ジョーのペニスを踵で踏みつけた。
「今度はあなたの番よ、スーザン」
見るとスーザンはアームチェアにのぼっていた。ヘザーがジョーから離れると、スーザンはジャンプし、ジョーの股間から突き出したペニスの先端に着地した。
ボキッという音が響き、ジョーが絶叫した。

ジョーのペニスはみるみる萎えはじめた。
「折れちゃった！」
ヘザーが笑った。
「ほんとだ、折れちゃったみたい！」
スーザンが、萎えたジョーのペニスをつまんで状態を調べながら答えた。
「さて、そろそろ決着をつけますか」
ヘザーは言いながら、ジョーを仰向けに寝かせ、ただ一つ残った睾丸の根元をきつくロープで縛った。そのロープの先端を思い切り引っ張ってアームチェアの背に結び付けた。睾丸はからっり下げられたような形になった。
「用意はいい？」
ヘザーはそう訊ねながら、靴を脱いで床に座った。
「オッケー！」
スーザンがヘザーと同じ姿勢をとって言った。
「三つ、数えるわ」
ヘザーが言った。二人は、右足を引いた。
「1、2、……3！」
ヘザーが叫んだ。二人は思い切り足を蹴りだした。ジョーの睾丸は、二人の踵に挟まれた。

ぐしゃっ！

室内に、ジョーの絶叫が響いた。やがて絶叫が弱まり、呻きへと変わった。

二人の女は、床に仰向けに寝そべり、ジョーの苦悶と絶望に満ちた呻きと嗚咽を聞きながら、恍惚に浸っていた。

ヘザーが起き上がり、激しく痙攣するジョーを慰めるように言った。

「大丈夫よ。ジョー。あんたの金玉は二つはとも潰したわ」

ジョーの鳴き声がオクターブをあげた。ヘザーは微笑みながら続けた。

「でも、まだペニスが残っているわ。ちょっと折れちゃったみたいだけど、引っ張ったり、叩いたり、つねったりはできそうよ」

ヘザーは、自らの乳房を揉みしだき、喘ぎながら言った。

「そう。蹴ったり、踏みつけたりもね！」

スーザンが同意した。

ジョーは、号泣するばかりだった……。